

13 草加宿 ~ 越ヶ谷宿

埼玉県越谷市

蒲生 ~ 新越谷

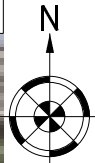
(歩行距離 1503m 18分)

歩く地図でたどる日光街道

http://nikko-kaido.jp/
JZE00512@nifty.ne.jp



忠勇碑・忠魂碑



東武鉄道新越谷駅
縄文時代までは海の中だったというこの地は、武蔵野台地の麓にある低地という意味で「こしがや」と呼ばれており、古くから稲作中心の集落が形成され、一大穀倉地帯をなしていました。日光街道の宿場町として栄え、川魚、鴨料理は名物。駅名は越谷市内で一番新しくできた駅ということで「新越谷駅」と命名されました。

「明治天皇田植御覧之處」用水完成記念碑、「道路工事寄附記念塔」宝暦7年(1757)など5基が建つ。このあたり帯は米どころだったのだろう。

coffee time

脇本陣

本陣の予備施設で、大きな藩で本陣だけで泊まりきれない場合や、宿場で藩同士が鉢合わせになった場合に、格式の低い藩が宿泊するなど、本陣に差し支えが生じたときに利用された。それ以外のときは一般客の宿泊をうけた。規模は本陣よりも小さいが、諸氏は全て本陣に準じ、上段の間などがあり、本陣と同じく宿場の有力者がつとめた。

coffee time

越谷の歴史

越谷市の市域のうち元荒川より南側の地域は古来より武蔵国埼玉郡に属し、長久・寛徳年間(1040~1045)野与党一族越ヶ谷太郎や小相模次郎が定住、野与党の氏神久伊豆神社(うじがみひさいずじんじや)が建てられたと伝えられる。元荒川以北の地域は戦国期までは下総国葛飾郡下河辺荘のうち新方庄に属する地域で、一帯は南北朝期までは藤原秀郷の子孫である下野国小山氏の門下、下河辺氏によって開発された八条院領の奇進系荘園であった。

江戸時代初期の貞享3年(1683)また一説によれば寛永年間(1622-1643)に太田川より西の地域を武蔵国に編入したのに伴い、元荒川より北の地域が武蔵国に編入された。江戸時代には、日光街道の宿場、越ヶ谷宿として栄えた。寛永2年(1625)に三宮・大道・大竹・恩間が岩槻藩領になり、寛文2年(1662)以降、見田方・南百・千足・四条・妻塚・柿ノ木が東方忍藩領になる。あとの地域はいわゆる「天領」であり、関東郡代の支配地域であった。

coffee time

蒲生の地名の由来

蒲生は、水生植物の蒲(がま)が生い茂っていたことから生まれた。日光街道の草加宿と越ヶ谷宿のほぼ中間に広がり、西南の境の綾瀬川は古くから豪雨のたびに流路を変えたので、そこかこに、蒲が茂っていた。蒲生は、またの名を加茂(かも)ともいい、日光街道の旅人がこの蒲生を通り、土地の人に地名を尋ねると、ある人は蒲生と答え、またある人は「いいや加茂」と応じたので混乱したという。「かも」も、蒲の生えている水辺を指すので、同じ意味のふたつの名があったとも考えられます。

もと蒲生村と加茂村の二村からなっていたといわれる。元禄16年(1703)日光街道を結城に向かった水野長福がこの間の紀行を「結城使行」と題した書に残している。このなかで蒲生を通った長福は、当所の名物であるという焼米を路傍で売っているのに興味をおぼえたが、ここは加茂村という村だと聞いた。ところが加茂ではなく蒲生だという者もあり、さらに加茂と蒲生は一村の中の地であるという者もいて戸迷っていたようであり、「道ぞ永き日にやき米を 加茂蒲生」との狂歌を詠んでいた。

coffee time

旅籠

旅のとき馬の飼料を入れる籠のことであったが、旅人の食料などを入れる器、それが転じて宿屋で出される食事の意味になり、食事を提供する宿屋のことを旅籠屋、略して旅籠とよんだ。宿場ごとに多くの旅籠があり武士や一般庶民の泊まり客で賑わった。接客用の飯盛女をおく飯盛旅籠、飯盛女をおかない平旅籠ができた。混雑時には相部屋が求められ、女性客は難儀をしたとされます。旅籠の宿泊代はおおむね1泊200~300文(現在の価格で3000円~5000円)程度が一般的だった。

coffee time

越谷の地名の由来

「越ヶ谷」は「越(腰)の谷」の意で、「こし」は「山地や丘陵地の麓付近」の意、「谷」は「低地」の意であると思われる。つまり、「大宮台地の麓にある低地」を指す地名であると推測される。「越谷」の地名は、昭和29年(1954)、合併により越谷町が成立した際に、合併前の越ヶ谷町と区別するために「ヶ」を取って「越谷町」としたこと由来する。したがって、旧越ヶ谷町にあたる越谷市の中央部の地名は、現在「越谷市越ヶ谷」であり、それ以外の「こしがや」が付く地名は、越谷町成立以降に出来た地名なので、「南越谷」「北越谷」「東越谷」などのように「ヶ」が入らない。同様の理由で「越ヶ谷高等学校」には「ヶ」が入り、「越谷北高等学校」「越谷南高等学校」などには「ヶ」が入らない。

埼玉県越谷市



清蔵院

清蔵院山門彫刻

清蔵院

蒲生の清蔵院は真言宗智山派で、慈眼寺と号し、天文3年(1534)祐範という僧が開山したと伝えられている。本尊は、十一面観音です。蒲生清蔵院の山門は、屋根など部分的に改造されていますが、その棟札により寛永15年(1638)関西の工匠による建立であることが確認されている。ことに欄間に掲げられている龍の彫刻をはじめ、虹梁の彫刻なども江戸初期の素朴な彫刻様式が伺われる。なお、この山門の龍は、巻の伝説では左甚五郎の作といわれ、夜な夜な山門を抜け出して田畑を荒らしたことから、これを金網で囲ったといわれている。

東武鉄道蒲生駅

明治時代に、蒲生、登豆、互曾根の3か村が合併してできた村名にちなんで命名されました。蒲(がま)の生い茂る水辺の地の意味で、古くは加茂(かも)村と呼ばれていましたが、「かも」も蒲の生えている水辺と文献で紹介されています。別の場所に建てていた旧駅舎は広々とした田圃とボラ並木のどかな場所でした。

清蔵院を出て旧日光街道「蒲生本町」交差点



蒲生久伊豆神社

創建年代等は不詳。当地近くには武蔵七党野与党一族大相模次郎能高(延久元年1069年歿)の居館跡があり、久伊豆神社は野与党の氏神といわれることから、古くに創建したものといわれ、大相模郷蒲生村の鎮守社となっていたという。



久伊豆神社